

次期学習指導要領の「構造化され再構築・更新される知識」に注目した小学校音楽科の実践的一考察
— 小学校4年生を対象とした「創作わらべうた」の実践をもとにして —

新山王政和* 蕃洋一郎**

*音楽教育講座

**附属岡崎小学校

A trial practice for the purpose of studying the updating and structuring of knowledge:
— A study of the creation of Japanese “WARABEUTA” in a primary school music class —

Masakazu SHINZANO* Yoichiro BAN **

*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Okazaki Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0864, Japan

要 約

今回の文部科学省学習指導要領改訂は、核となる「新たな学びの3観点：何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶか」「新たな学力観（3つの柱）：個別の知識・技能、思考・判断・表現力、人間性や学びに向かう力」等が示された後、両者を繋ぐ「見方・考え方」が教科別に示された。その中でも、知識に対する新しい捉え方を示した「更新される知識」という考え方が注目に値しよう。筆者はかねてから「予め集大成された知識をお勉強として学んでいくのではなく、知識は比べたり確かめたり整理したりする思考判断を経てより強固な知識として構造化され、それを活用したり活動へ生かしたりする試行錯誤を通じて自分なりに再構築されていく。そのプロセス全体が知識の更新へと繋がる」ものであると考えている。音楽科では「知っていることと出来ることは違う」、つまり知っているだけでは演奏に繋がっていかない、演奏として音へ還元し音楽表現へ結び付けることができ初めて知識が生きてくる、ということが経験的に知られている。その過程では、知識の実体を知り、それを自分なりに整理し、練習を通じて一つ一つ理解し得たことを蓄積していくのだが、これこそ正に「更新される知識」であろう。このように、既に音楽科における活動ではその視点が随所に組み込まれており、その具現化に適しているとも言える。よって本報告では、前半で学習指導要領改訂に関わる資料より「更新される知識」へ至った概要を整理し、後半では本学附属岡崎小学校の蕃洋一郎教諭によって行われた実践へ筆者の持論である「構造化され再構築・更新される知識」を落とし込んでみたい。

キーワード：更新される知識 知識の構造化 音楽科授業

keywords : updating of knowledge structuring of knowledge school music class

現状の小学校音楽科授業に対する所感

文部科学省学習指導要領（以下、学習指導要領と記す）の改訂作業の進捗に伴い様々な資料が示され、何が問題なのか、何が議論されているのかを推し測ることもできるようになった。これらを鑑みながら、本報告に於いては筆者が重視している事項について要約抜粋する形で取り上げている。それに先立ち、現状の小学校音楽科授業に対して筆者が課題と感じていることを、所感の形で整理しておきたい。

①小学校への日本音楽導入に伴う教材開発、特に地域や郷土の音楽の教材化に取り組むべきであろう。また鑑賞曲の教材研究も同様である。現在は教科書会社が示したものを共通教材のごとく扱っているが、専門家としての音楽科教師の自負と力量に期待したい。

②知覚から感受へ深める。気づいて、違いを聴き取れているのに、そこから感じ取ることができない子供へ

の対応策の検討が必要であろう。

③音楽づくり&創作の質的充実、「たまたま」や「偶然」による「音ならべ」からの脱却。表現したい思いや表したいイメージをしっかりと抱いてから、音を音楽へと構築していくスタイルの音楽づくりや創作の活動を模索する必要がある。

④リズムに乗った音楽づくりから、コード進行（和声進行）に乗った旋律づくりへの試み。リズム創作ばかりではなく、和声の響きを感じ取りながら旋律を紡いでいくような活動も模索してみたい。

⑤表現と鑑賞の一体化をさらに進めたい。音楽活動における表現と鑑賞の関係性は、英語の「話すことと聞くこと」の関係と同じである。

⑥アクティブ・ラーニングについて、様々なことが言われているが、文科省資料によると、特定の活動や特別なことを求めているのではないことが分かる。さら

に「習得・活用・探求」の学習活動の中へ適切に落とし込んでいくことが必要であろう。これについては本報告の p.3 において詳述したい。

⑦ICT 教育。ネット機器の活用のみが脚光を浴びているが、機器使用法だけでなく知的財産権（ネットマナー）についても小学校から触れていくことが必要であろう。これについては機会を改めて考えてみたい。

⑧インクルーシブ教育が浸透しつつあるが、運用法が明確なユニバーサルデザインによる教育も視野に入れてみたい。これも機会を改めて考える。

以上の 8 点を今後検討すべき課題であると考えている。学習指導要領が改訂されるこの機会に、これらの現状を改善する方向で検討するとともに、小中学校の先生方の前向きな取り組みにも期待している。

以下の章では、まず今回の学習指導要領改訂で筆者が注目している「更新される知識」について考えてみる。次に文科省発信の資料を整理することで改訂の概要を確認し、そこへ至る背景を明らかにした後、本学附属岡崎小学校の蕃洋一郎教諭によって行われた実践へ筆者持論の「構造化され再構築・更新される知識」を落とし込んでみたい。

筆者が注目する「更新される知識」

文科省資料「芸術系ワーキンググループにおける審議のまとめ（案）H28.8/26」^①の中で触れられた「更新される知識」という捉え方を抜粋して紹介する。なお筆者が注目する部分へ下線を付しておく。

「特に、『知識』については、本ワーキンググループでは、以下のとおり整理した。芸術系教科・科目における『知識』については、一人一人が感性などを働かせて様々なことを感じ取りながら考え、自分なりに理解し、表現したり鑑賞したりする喜びにつながっていくものであることが重要である。体を動かす活動なども含むような学習過程を通じて、知識が個別の感じ方や考え方等に応じて習得されることや、新たな学習過程を経験することを通じて、知識が更新されていくことが重要である。」

筆者はこれを次のように解釈している。

知識とは、既知のことを覚えるだけでなく、習得・活用・探求を通じて自分自身の中で再構築・更新されていくもの。そのプロセスで、それまでに獲得した知識や経験と照らし合わせながら整理し（構造化）、自分なりの価値観や意味付けを行うとともに（再構築）、新たにその活用を通じて知識の正しい捉えや自分なりの価値観に齟齬の無いことを確かめることで真に生きた知識として更新されていく。つまり音楽科では、音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みなどを単に暗記科目のように覚えるだけでなく、それまでに積み重ねてきた音楽活動や音楽経験と照らし合わせながら自

分なりに整理する（構造化）。そして、それらが示す意味やその働き、効果などを考えたり体感したりすることで自分なりの嗜好や価値観へと高めていく（再構築）。さらに、様々な体験や活動を通じて考えたり確かめたりすることで、自分自身の捉え方が間違っていないか、他の考え方は無いのか、自分なりの価値観に齟齬や矛盾は無いのか、思考を伴った試行錯誤によって確認し、知識をより強固なものとして身に付けるとともに、生きた知識として再構築・更新していく。

そこで考えられる具体的な活動の一例として、例えば次のようなものがあるだろう。

「f と書いてあるから強く歌う」という表面的な捉えではなく、f の記号上の意味や楽譜上の役割について既に自分自身が知っていることと比べたり整理したりすることで知識が構造化され、次になぜそこへ f の指示があるのか考えたり試したりしながら自分なりにその指示の意味を理解する（知識の再構築化）。さらに様々な種類の f や f の歌い方があることを知り、どのような場合にどのような f がふさわしいのか、自分なりの考えをまとめていく（知識の更新）。このようなプロセスを経ることで知識が生きたものとして獲得されるだけでなく、さらに別の場面で求められる f の意味や、f の異なる役割や機能へ出会う度に f に関する知識が次々と更新されていく。

冒頭の要約でも記したが、集大成された知識を「お勉強」として学んでいく知識注入や丸暗記のスタイルだけでは、今後めまぐるしく多様化し変化変容する社会を生き抜いていくために必要な力として身に付けることには必ずしも繋がっていかない。つまり知識を知識として知っているだけでは、それを活用する段階にまで子供達の頭が及んでいかないということであり、「知識は比べたり確かめたり整理したりする思考判断を経てより強固な知識として構造化され、それを活用したり活動へ生かしたりする試行錯誤を通じて自分なりに再構築されていく。そのプロセス全体が知識の更新へと繋がる」ものであると考えている。例えば音楽科では「知っていることと出来ることは違う、知っているだけでは演奏に繋がっていかない、演奏として音へ還元し音楽表現へ結び付けることができ初めて知識が生きてくる」ということが知られている。そのプロセスでは、知識を知り、自分なりに整理し、練習を通じて実感を伴いながら理解したことが蓄積されていくのだが、これこそ正に構造化され再構築・更新される知識であると言えよう。

この知識の捉え方については、今回参照した資料より 3ヶ月前に出された 5/26 付資料では「体を動かす活動なども含むような学習過程を通じて、知識が個別の感じ方や考え方等に応じて構造化されることや、さらに新たな学習過程を経験することを通じて再構築され、知識が更新されていくことが重要である。」と記され

次期学習指導要領の「構造化され再構築・更新される知識」に注目した小学校音楽科の実践的一考察
ていた。(下線筆者: 8/26 付資料と異なる部分)

この時点では「構造化」「再構築」の言葉が記されており、知識は学習過程を通じて構造化され、さらに新たな学習過程を経験することを通じて再構築されるものであることが明示されていた。この文言が 8/26 付資料で削除されたことで、知識の捉え方の趣旨が少々曖昧になってしまったことを残念に思う。

学習指導要領改訂作業の概要

H26 年度から始まった学習指導要領改訂作業は H28 年度内に終わり、小学校は H32 年度から移行実施される予定である。これに向けて、教育現場を対象とした次のような調査が実施されていた。

- ①国立教育政策研究所「小学校学習指導要領実施状況調査」: H25 年実施、音楽科は 6 千名以上の 6 年生を対象として行われた。⁽²⁾
- ②日本音楽教育学会「日本音楽教育学会会長諮問プロジェクト調査」H27 年実施、回答者 2466 名。⁽³⁾
- ③日本音楽教育学会「学習者アンケート Web 調査」: H27 年実施、回答者 303 名。⁽⁴⁾

今回の改訂作業に先立って国立教育政策研究所が①の調査を行っているが、これは大規模に行われていることから分析結果の信頼性は高く、改訂にも反映されていくと考えられる。また日本音楽教育学会が実施した②と③の調査は専門家集団によって分析されており、特に②は緻密な分析が行われていることから何らかの形で影響を与えていると思われる。

新たな学力観(3つの柱)と新たな学びの3観点

改訂作業の早い段階でまとめられた「教育課程企画特別部会論点整理 H27.8/26」⁽⁵⁾ および教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案) H28.8/26」⁽⁶⁾によると、「先を見通すことの難しい時代において生涯を通じて不断に学び、考え、予想外の事態を乗り越えながら自らの人生を切り拓き、より良い社会づくりに貢献していくことのできる人間を育てることが必要」とあり、これを受けた「ゆとりか詰め込みかの二項対立的な議論の終結」が、この「新たな学力観(3つの柱)」と「新たな学びの3観点」へ繋がっていることが分かる。

新たな学力観(3つの柱)の骨子

- ①「個別の知識・技能」: 何を知っているか、何ができるか(生きて働く知識・技能の習得)
- ②「思考・判断・表現力」: 知っていること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる)
- ③「人間性や学びに向かう力」: どのように関わり、よりよい人生を送るのか(学びを人生や社会に生かす)

新たな学びの3観点の骨子

- ①何ができるようになるか: 上記「新たな学力観(3つの柱)」。社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む。
- ②何を学ぶか: 今回の改訂作業で精査精選されるもの。新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた目標・内容の見直し。
- ③どのように学ぶか: 主体的・対話的で深い学びをめざした、アクティブ・ラーニングの視点からの学習過程の改善。

ここで示された考え方は、S22 年に示された「学校教育法」第 30 条「～略～基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養う～略～」の基本方針へ立ち返ったものであろう。⁽⁷⁾

アクティブ・ラーニングの整理

文科省がイメージするアクティブ・ラーニングについて、「教育課程企画特別部会論点整理 H27.8/26」から要点を抜粋し整理しておく。⁽⁸⁾

- ①習得・活用・探求という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。～略～教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。～略～
- ②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広め深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。～略～言語活動の充実も、引き続き重要である。～略～
- ③子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。～略～学習活動を自ら振り返り意味付けしたり、獲得された知識・技能や育成された資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。～略～

また文科省の合田哲雄教育課程課長は「教育新聞 H28.8/10」において次のように言及している。⁽⁹⁾

「グループ討論やプレゼンは、アクティブ・ラーニングの一つのやり方。単元のすべてをアクティブ・ラーニングで指導するというのではない。教員自身が子供をアクティブ・ラーナーにするためにどういう手順でやっていくのかを考えないといけない。目の前の子供達の現状を見て、アクティブ・ラーニングを活用すべきだ。知識が不十分であれば、まずは知識の習得を図っていき、次の展開にもっていき授業デザインが必要だ。知識の習得は一見、学び直しや教え込みに見える。だがこれは、対話的な学びや探求的な指導をすれば、

その過程がアクティブ・ラーニングだと思う。」

この資料と談話から分かったとおり、今回の改訂で文科省が想定しているアクティブ・ラーニングは特定のやり方やパターン化を示唆しているものではない。また子供自身の学びをアクティブにする働きかけを行うという意味であり、決して子供へ丸投げしたり任せっ放しにしたりする放任型の授業ではない。あくまでも行き過ぎた教師主導型や一方的な知識注入型の授業を戒めているものであり、子供をアクティブにするために教師も共にアクティブになるような、子供と教師が協力し合って一つの授業をデザインしていくやり方を求めている。このアクティブ・ラーニングについては「本が100冊あれば100通りのやり方があり、研究者が10人いれば10通りのやり方がある」と言われるが、今回の改訂で求められているものは文科省資料や学習指導要領等を参考にすべきであろう。

音楽科における審議の概要

次に「芸術系ワーキンググループにおける審議のまとめ(案) H28.8/26」⁽¹⁰⁾から「音楽科の見方・考え方」と、新たな学力観(3つの柱)の内の「思考力・判断力・表現力」を整理しておきたい。なお、拙論「文部科学省学習指導要領改訂の動向と音楽科をめぐる議論の整理」⁽¹¹⁾では、本報告で用いた資料より3か月古い5月26日付資料を用いていたため、一部の情報を更新または変更している。

音楽科における「見方・考え方」(H28.8/26)

①小学校音楽科の「見方・考え方」

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること。

②中学校音楽科の「見方・考え方」(下線筆者：小学校と異なる部分)

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

この「見方・考え方」は今回から加えられた重要なものであり、様々な学習活動においてそのコアになるものとして位置付けられている。前述した「新たな学びの3観点：何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶか」と「新たな学力観(3つの柱)：個別の知識・技能、思考・判断・表現力、人間性や学びに向かう力」は、この「見方・考え方」をコアにして関連付けることとされており、以下に記す「資質・能力」や「知識、技能、思考判断」も、この「見方・考え方」を拠り所として行うことが求められている。

また、現行指導要領までは小学校と中学校の間で連続性や継続性が担保されていない箇所も散見されたが、今回の改訂では両者の間で齟齬が生じないよう発達段階に則った調整が行われており、小中9年間の一貫したカリキュラムを見据えた内容が吟味されている。

音楽科で育成をめざす資質・能力(H28.8/26)

①小学校音楽科で育成をめざす資質・能力

音楽的な見方・考え方を働かせて、表現及び鑑賞の活動に取り組むことを通して、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

*曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。

*音楽表現を工夫したり、楽曲や演奏のよさなどを見いだしながら音楽を味わって聴いたりする力を育てる。

*音楽活動の楽しさを味わい、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性をはぐくむとともに、豊かな情操を養う。

②中学校音楽科で育成をめざす資質・能力(下線筆者：小学校と異なる部分)

音楽的な見方・考え方を働かせて、表現及び鑑賞の幅広い活動に取り組むことを通して、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

*曲想と音楽の構造や背景との関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かして音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。

*音楽表現を創意工夫したり、音楽を自分なりに価値判断しながらよさや美しさを味わって聴いたりする力を育てる。

*音楽活動の楽しさを味わい、音楽を愛好する心情をはぐくむとともに、音楽に対する感性を豊かにし、豊かな情操を養う。

ここでも、小学校と中学校の連続性や継続性が意識されており、両者の間で齟齬が生じないよう発達段階に則った調整が行われたと思われる。これにより、小中9年間の一貫したカリキュラムが鮮明に浮かび上がっており、小学校音楽科と中学校音楽科のいずれの授業者に対しても「9年間を通して子供を育てる」という意識化を強く促している。

音楽科における知識・技能(H28.8/26)

①小学校音楽科における「知識・技能」

*曲想と音楽の構造との関わりについての理解、音符休符、記号や音楽に関わる用語の意味や働きについて音楽活動を通じた理解、など。

次期学習指導要領の「構造化され再構築・更新される知識」に注目した小学校音楽科の実践的一考察

*自分で音楽表現をしたり友達と一緒に音楽表現をしたり、自分の思いや意図を音楽で表現したりするための技能、など。

②中学校音楽科における「知識・技能」（下線筆者：小学校と異なる部分）

*曲想と音楽の構造や背景との関わり及び音楽の多様性などの音楽文化について理解することや、音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること、など。

*自分なりに音楽表現を創意工夫したり、思いや意図を音楽で表現したりするための技能を身に付けること、など。

これまで情操や感性という言葉で実体が掴みにくく何を教えてよいのか曖昧だった部分が、知識と技能に分けられたことにより、「理解すること」と「できるようにすること」が整理され、指導の方向性が分かりやすくなったと思われる。もちろん音楽の活動とは「これは知識、これが技能」というように区別し分離することは難しいのだが、前述したとおり「構造化され、再構築・更新される知識」という知識の捉え方の視座を加えることで、実際の授業場面においてかなりの部分が明確になると考えている。そもそも音楽という分野が「知っていることと、できることは違う」という性格を持っているので、この知識と技能を分けて考えることにより、子供にとっても活動の目当てや目標が分かりやすいものとなり、授業者にとっても評価の判断基準を設定しやすくなると考えられる。

音楽科における思考力・判断力・表現力 (H28. 8/26)

①小学校音楽科における「思考力・判断力・表現力」

*音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、知識や技能を得たり活用したりして、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図を見いだす力、など。

*音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、知識を得たり活用したりして、楽曲や演奏のよさなどを考え味わい、自分にとっての音楽のよさなどを見いだす力、など。

②中学校音楽科「思考力・判断力・表現力」（下線筆者：小学校と異なる部分）

*音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知識や技能を得たり活用したりして、音楽表現を創意工夫し、どのように表すかについて思いや意図を生み出すこと、など。

*音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている

要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知識を得たり活用したりして、音楽を自分なりに解釈したり、音楽と人々の暮らしなどとの関連から音楽を捉えたり、自分にとっての価値を考えたりし、よさや美しさを味わい、音楽の意味や価値を生み出すこと、など。

これまで特別扱いされていた「感性、情操」が、順次性や上位下位の概念を持たないものとされ「知識や技能・能力」や「思考力・判断力」と並び置かれたことに注目したい。このような「見方・考え方」をコアとして「知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力」の3つをそれぞれ互いに往還させるという考え方は画期的であり、これが明確に打ち出されていることを強調しておきたい。

小学校音楽科における「創作わらべうた」の実践

～構造化され再構築・更新される知識の視点から～

今回の学習指導要領改訂の中でも特に「更新される知識」という考え方に筆者が注目していることは前述したとおりである。繰り返しになるが、注目する理由として筆者の持論を述べておく。

お勉強として知識を学んでいく「知識注入スタイル」や「丸暗記スタイル」の学習方法では、単に知識を知識として知っているだけで、その知識を活用する段階にまで子供達の頭が及んでいかない。一方音楽の分野では「知っていることと出来ることは違う」、つまり知っているだけでは演奏に繋がっていかない、演奏として音へ還元し音楽表現へ結び付けることができ初めて知識が生きてくるのが広く知られている。その過程では、まず知識の実体を知り、それを既に獲得している知識と比べたり確かめたりしながら自分なりに整理し（思考判断を伴う知識の構造化）、活動や練習において一つ一つ体感しながら理解し得たことを蓄積していくのだが（試行錯誤を伴う知識の再構築）、このプロセスこそが「構造化され、再構築・更新される知識」であると言えよう。このように、既に音楽科授業には「構造化され、再構築・更新される知識」が随所に組み込まれており、その具現化にも効果を上げている。⁽¹²⁾よって本章では、本学附属岡崎小学校の蕃洋一郎教諭が小学校4年生を対象に2016年の1学期に行った実践へ、この「構造化され再構築・更新される知識」の視点を落とし込んでみたい。

「創作わらべうた」実践の概要

この実践で注目しているのが次の2点である。

まず、箏を用いてわらべうたをつくらせたことに目を向けたい。音楽づくりの活動では、それがわらべうたづくりであっても鍵盤ハーモニカやリコーダーを用いた実践が多い。しかし本実践では箏を用いて日本の

音階を体感させたり、箏の基本的な弾き方（音の出し方）を体験させたりすることで、身近な楽器として意識させたことを意義深いと考えている。

次に、箏の弦を模した8線譜に記録させながら曲を作らせたことにも目を向けたい。（文末の写真参照）無理に5線譜を用いなかっただけでなく、曖昧な図形やメモの形で記録する安易な方法を取ることもせず、目の前にある箏の弦の上に付箋紙を置かせて音の高さや並べ方を考えたり試したりさせながら旋律を工夫させ、それをそのまま箏の弦を模した8線譜に写させる方法をとったことを意義深いと考えている。

以下、本実践へ筆者の持論である「構造化され再構築・更新される知識」を落とし込んでみたい。

1. 単元名（2016年1学期に実施）

「ことばに合わせて、動きに合わせて、つくって遊ぶよ、ぼくのわたしのオリジナルソング」

（箏の音階を用いた音楽づくり）

2. 単元の目標

* 言葉を発音する時の音の上がり下がりから旋律やリズムを考えたり、遊びによる体の動きから速度を考えたりしてわらべうたづくりに取り組む中で、音楽を特徴づける諸要素に対する見方や考え方、感じ方を広めることのできる子供にしたい。

* 仲間の演奏に触れたり録音によって演奏を客観的に振り返ったりすることで、自分の追求の確かさや仲間の追求のよさを感じ取ることのできる子供にしたい。

3. 授業の概要（筆者が抜粋要約）

活動の目標：つくったわらべうたで幼稚園児をよろこばせたい

事前活動：2種類の音楽遊び（次項参照）

活動①わらべうたの歌詞をつくってみよう

活動②箏の音階を使って旋律をつけてみよう

活動③言葉のリズムや上がり下がりを手がかりにしてわらべうたの旋律らしく工夫する

活動④幼稚園児も歌って楽しめる工夫

活動⑤幼稚園児が喜んでくれる工夫

活動のまとめ：互いの完成曲について語り合う

4. 授業の大まかな流れ（筆者が抜粋要約）

* 事前活動：「うたいながら遊んだよ」

（ゆうびんやさん、あんたがたどこさ）

「言葉に合わせてリズム打ちしたよ」

（トマト、チューリップ等）

大縄跳びや毬付き、手遊び歌で体を動かしながら歌うことで、音楽に合わせて体を動かす楽しさを意識させた。また、リズムへ意識を向けさせるために、言葉に合わせて手を叩く活動を楽しませた。

【筆者所見】知っているわらべうたを思い出して曲に浸ることで、音やリズムの面からわらべうたらしさを整理する。わらべうたに関する知識の構造化。

*活動①わらべうたの歌詞をつくってみよう

入学前の思い出をスピーチさせることで、幼稚園児と一緒に歌えるわらべうたの歌詞をイメージさせ、小学校を紹介する言葉を入れる工夫をさせた。

【筆者所見】わらべうたの雰囲気合った言葉を考えることで、歌詞の面からわらべうたらしさを整理する。わらべうたに関する知識の構造化。

*活動②箏の音階を使って旋律をつけてみよう

鳴らしたい音に合う弦を探させて、色々な音の組み合わせを試したり考えたりさせる。

【筆者所見】わらべうたの雰囲気合った音の並べ方を考えることで、旋律の面からわらべうたらしさを整理する。わらべうたに関する知識の構造化。

*活動③言葉のリズムや上がり下がりを手がかりにして、わらべうたの旋律らしく工夫する

言葉のリズムや音の上がり下がりを手がかりにするわらべうたが作れそうだと問題意識を持たせるために、自分が作った歌詞に合う音を箏で探したり試したりする活動に取り組ませる。

この段階では、次のような追求が見られた。

- ・たくさん音を使ってかっこよくしたい子供
- ・高音域と低音域の雰囲気の違いを工夫する子供
- ・単調だから変化をつけて工夫したい子供
- ・リズムに乗る工夫をしたい子供

【筆者所見】わらべうたらしさを追究する。わらべうたに関する知識の再構築。

*活動④幼稚園児も歌って楽しめる工夫

作った作品を視覚的に確認できるように箏の弦を横線で示し、その上に歌詞の言葉を付箋紙で貼っていかせた。つまり音の高さを箏の弦を模した線で表わし、リズムを付箋紙の間隔で表わした8線譜になる。

わらべうたが完成できたと満足したタイミングで、仲間と歌う場面を設けた。仲間から、歌いやすさや楽しさ等のアドバイスを貰い、自分の考えと比較した。

この段階では、次のような追求が見られた。

- ・音の上がり下がりをつけすぎると、歌いにくいよ
- ・音の高さが跳び過ぎて、かえって歌いにくいよ
- ・音と音の間隔を広げてみれば
- ・歌いやすいテンポを工夫してみれば

【筆者所見】うたいやすいわらべうたについて、思考を伴った試行錯誤を繰り返す。わらべうたに関する知識の再構築。

次期学習指導要領の「構造化され再構築・更新される知識」に注目した小学校音楽科の実践的一考察

***活動⑤幼稚園児が喜んでくれる工夫**

仲間同士で聴き合ったり、ICレコーダーに録音して自ら聴いてみたりして、幼稚園児と一緒に歌うことができると感じることのできるわらべうたに近づこう、思考を伴った試行錯誤を重ねた。

仲間からのアドバイスを聞いた後で改めて自分の録音を聴き、様々な視点から考え直したり試行錯誤したりする“ふり返し”を促した。その後、動きながらも歌いやすい曲にしたいという追求が生まれ、繰り返し録音を聴いて自己評価したり、仲間と一緒に歌ってもらってアドバイスを貰ったりするようになった。

この段階では、次のような追求が見られた。

- ・幼稚園児が歌いやすいテンポにする
- ・幼稚園児が体を動かしやすい速さにする
- ・身体動作で遊びながらも歌える歌にする
- ・音の高さの跳び方（音の跳躍）を少しにする
- ・音の高さが跳ぶ時は、間（休符）を挟む
- ・音の高さの上がり方や下がり方を楽しくする
- ・タッカリズムで跳ねる感じを出せた

【筆者所見】身体動作を伴ったわらべうたについて、思考を伴った試行錯誤を繰り返す。わらべうたに関する知識の再構築。

***活動のまとめ：互いの完成曲について語り合う**

自分が作った曲のよさを体感したり、自分たちの学びを実感したりするために、次の働きかけを行った。

- ・活動の初期に録画していた映像と、完成したわらべうたで遊んでいる映像を比較させた
- ・幼稚園児に見立てた1年生と遊ぶ場を設けた
また実践が終わった後もさらに思考を伴った試行錯誤を深めるために、次の働きかけも行った。
- ・子供同士の関わり合いの中で交換し合ったアドバイス交換について語り合った
- ・完成したわらべうたで遊んでいる映像を見ながら、語り合ったり感想交流をしたりした

【筆者所見】わらべうたについて考えてきたこと、試したこと、それによって学んだことの整理。わらべうたに関する知識が子供の中で更新された。

***単元終了後の子供達の姿のまとめ。**

- ・わらべうたらしい歌詞を吟味することができた
- ・歌詞に合う音や、わらべうたに合った速度、リズムを工夫しながら音楽づくりを楽しむことで、音楽を特徴づける諸要素へ関心を持ち、諸要素への見方や考え方の幅を広げることができた
- ・自分がつくったわらべうたを皆で歌い、1年生とも一緒に歌うことで、仲間と協力したり、他者を音楽で楽しませたりする喜びを感じることができた

【筆者所見】音が日本の音階に限定されている箏を用いたことで音の選択に関わる負担が軽減されたため、

子供達は音の並べ方と繋がり方（リズムや旋律）に集中して試行錯誤を繰り返したり、友達同士で意見交換を重ねたりすることができたと思われる。この活動を通じて「わらべうたらしさ」や「うたいやすさ」について問い直し、歌ったり話し合ったりする創意工夫によって新たな知見を得ることができたと言えよう。正に「構造化され、再構築・更新される知識」の具現の一例であると考えられる。

おわりに

本報告では、学習指導要領の改訂作業を概観することで筆者の持論である「構造化され、再構築・更新される知識」という視座を考察するとともに、それを蕃洋一郎教諭の実践へ落とし込むことを試みた。知識を言葉上の意味だけで理解したり丸暗記したりするのではなく、それまでに獲得してきた知識と比べたり整理したりしながら自分なりに知識の構造化を図り、思考や試行錯誤を通じて正しく捉えたり確かめたりしながら自分なりの理解の仕方知識を再構築する。そしてそこで得た新たな知見に基づいて知識を更新していく。このようなプロセスは、知識を演奏表現へと結びつけていく音楽活動では不可欠である。今後はこの視点から研究を深めていきたい。最後になったが、分析対象として実践を提供して下さった愛知教育大学附属岡崎小学校の蕃洋一郎教諭へ謝意を表しておく。

[注および引用文献]

- (1)文科省「教育課程部会配付資料：芸術系ワーキンググループにおける審議のまとめ（案）H28.8/26」、2016
- (2)国立教育政策研究所「小学校学習指導要領実施状況調査：結果のポイント」2015。並びに「同調査：教科別分析と改善点（音楽）」、2015
H25年2～3月実施、H27年2月結果公表。小学校911校(4.2%)を無作為抽出し、音楽科は6千名以上の6年生を対象として行われた。同時に被験者の児童へ音楽科を教えている教員（音楽専科教員と学級担任の両方を含む）と、所属の学校長にもアンケート調査を行っている。
- (3)日本音楽教育学会「会長諮問プロジェクト調査報告書～子どもたちと考える教科音楽～」、2015
H27年5～7月実施、H27年10月結果公表。15都道府県の小学校30校へ依頼（大学附属関連校10校含む）、有効被験者数は2466名。
- (4)日本音楽教育学会「『音楽についてこう考える、こう言いたい』学習者アンケートWeb調査」、『音楽教育実践ジャーナル』、2016
H27年5月～7月Web調査を実施。回答者は303名（小学生=72名、中学生=193名、高校生=38名）
- (5)文科省「教育課程企画特別部会論点整理 H27.8/26」、

- 2015
- (6)文科省「教育課程部会配付資料：次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)H28.8/26」、2016
- (7)「学校教育法 S22」第4章第30条の2項
「前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくみ、主体的な学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」
- (8)前掲書(5)
- (9)教育新聞 2016.8.10「合田教育課程課長に聞く」、
https://www.kyobun.co.jp/news/20160812_01/
- (10)前掲書(1)
- (11)新山王政和・市江真理子・小出真規子・長岡知里
「文部科学省学習指導要領改訂の動向と音楽科をめぐる議論の整理～対応例としての小学校音楽科『短時間学習』の提案と合わせて～」、愛知教育大学研究報告第66輯、2016 発行予定
- (12)新山王政和『改訂版新しい視点で音楽科授業を創る』2011、Stylenote。並びに「気付く・感じ取る・比べる・考える・まとめる・伝える、鑑賞は音楽科授業におけ

る Active Learning」、『音楽鑑賞教育 vol.22』2015

[参考文献・資料]

- * 楠見孝・道田泰司編『批判的思考と市民リテラシー』、誠信書房、2016
- * 文部科学省「答申：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」2012
- * 文部科学省「OECDにおけるキー・コンピテンシーについて」中央教育審議会審議資料（未定稿）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm
- * 国立教育政策研究所「3.(4)求められる資質・能力の枠組み試案：育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価に関する検討会資料」2013
- * 文部科学省「諮問：初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」2014
- * 国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究・報告書7、資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理」2014
- * 文部科学省「教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方に関する補足資料 ver.5」2015

[写真：箏を模した8線譜の事例]

